

# 地質標本館20年のあゆみ

地質標本館

## 開館20周年記念式典

地質標本館は、1980年8月19日に開館しました。ミレニアムの2000年は、開館からちょうど20年目にあたるわけです。これを祝う式典が、7月28日(金)の工技院統一公開日にあわせて行われました。

当日はいつもより少し早めの9時20分に開館し、来館のお客様にも式典に参加していただくことにしました。はじめのうちは少々来館者の出足が悪く、関係者をやきもきさせましたが、開館時間ごろには当日オープンの特別展「水晶-クリスタルの魅力-」がお目当ての人たちが大勢お見えになり、雰囲気盛り上がりしました。開会の辞に続いて小玉所長からお祝いの言葉をいただき、館長挨拶の後、土浦市から来た赤間正樹君、真家悠太君、小沼泰典君たち中学一年生3人がクス玉を割って、式典に花を添えました(写真1)。赤間君たちには地質標本館から、岩手県陸前高田市玉山産の両頭水晶が記

念に送られました。

小玉所長の話には、自身も子供のころは河原や海岸の石や崖で縞をなす地層に言葉で表せない魅力を感じたこと、「石」のもつ神秘性にひきつけられたことが後年地質学を専攻するにいたった動機の一つであったという体験談が盛り込まれていました。日本全土で開発が進んだ昨今は、石との出会い一つにせよ、かつてのようなわけには参りません。地質標本館は、地球とその上に育まれた生命の歴史に思いをさせ、地球についての先端的研究成果を知ることができる、地球との出会いの場所として今後も歩みを進めるつもりです。

## 10周年記念から今日までの館活動をふりかえって

1980年代後半のバブル経済は、地方博物館・美術館の開館ブームを呼び起こし、北関東地方にも個性的な展示施設がいくつかできました。同じころから恐竜ブームも巻き起こりました。恐竜の絶滅は、小惑星衝突とこれによって引き起こされた地球環境の激変というカタストロフィックな事象に原因するという説が提唱され、地球環境問題が注目される引き金ともなりました。一方で、恐竜は展示の目玉になるとばかりに、新設の博物館はどれも競って「恐竜」を置くような風潮ともなりました。この中で、開館から一定時間経過して展示の陳腐化が始まった標本館は、人を呼び寄せる施設としてやや苦しい展開を余儀なくされた感は否めません。1990年から10年間の地質標本館の活動は、研究所の研究成果を公表するという設立の原点に立ち返って、研究成果の公表のチャンスを多様化してきたということが言えるのではないかと思います。

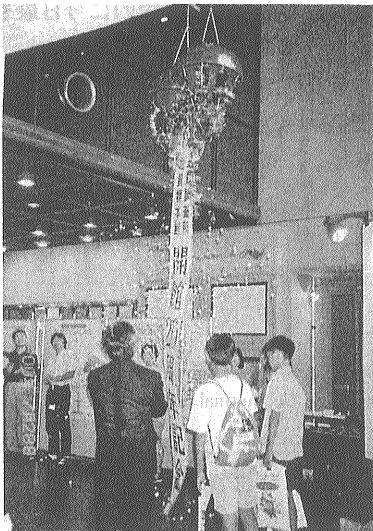


写真1 開館20周年記念式典でのクス玉割り。

キーワード：地質標本館、20周年

## (1) 企画展の実施

常設展に加えテーマ別の企画展示を開催することは、1990年4月の神谷雅晴館長の就任とともに始まりました。毎年4月第3週の科学技術週間と学校の夏休みの時期にあわせた夏季特別展示が、この年から定例化しました。1990年は地質標本館の開館10周年ということもあり、夏季特別展では地質標本館所蔵の日銀ダイヤを初公開する「ダイヤモンド展」を行いました。あわせて、ダイヤモンドおよび恐竜の専門家による記念講演会を催しました。1991年の企画展は、科学技術週間特別展示が「大陸の衝突と資源－中東地域のエネルギー鉱物資源」、夏季特別展示が「地球化学アトラス」および「30万年前の植物化石を探る」で、いずれも地質調査所での研究成果に基づくものです。また、地質調査所の研究活動を支える薄片作成と特殊機器製作の部門も特別展示に参加し、92・93年の「薄片のできるまで」および「調査研究用機器を試作する」が公開されました。ここ数年は研究成果の公開と普及が研究所全体にとって重要と認識されるようになり、成果公表に関係した業務を行う部署が所内にもいくつか新設されてきました。この流れの中で、科学技術週間での展示の企画と準備は地質標本館の業務から外れました。しかし夏季特別展は地質標本館固有の企画として重要性を高め、1999年の「ブラジル産白亜紀魚類化石の世界」、2000年の「水晶－クリスタルの魅力－」と、多くの方々にお楽しみいただいています。

## (2) 緊急展示の実施

火山噴火や大地震などの「天変地異」は、多くの人々の生活基盤を危うくすると同時に、災害に巻き込まれなかった一般の関心も非常に高いものです。1990年代前半は、長崎県雲仙火山の噴火や兵庫県南部地震など日本の災害史に残る地質災害が起きました。地震・火山災害の勃発に際しては地質調査所内の関係部課が協力して緊急研究を起こし、臨時的調査・研究を行います。これでわかったホットな結果を、即時、地質標本館を舞台に公表していこうというのが緊急展示の試みです。

組織だった緊急展示は、雲仙火山の噴火に関する特別展示(1991年)から始まりました。前年11月から約200年ぶりに活動をはじめた雲仙火山は、5

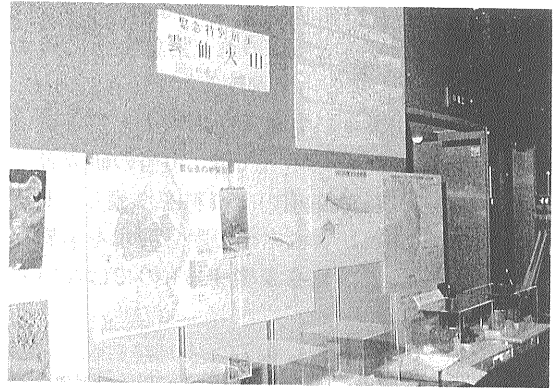


写真2 最初の緊急特別展示となった「雲仙火山の噴火と活動史」(1991年6月)。

月に溶岩ドームを出現させ、活動長期化の気配を見せていました。地質調査所では火山地質課(当時)や地形情報課が九州出張所と連携して観測にあたり、光波測距により求めた山体の変形が短期的活動予測に有効であることを明らかにしました。このような地質調査所の研究活動をいち早く社会に伝えようと、地質標本館では6月上旬を目標に手作りの特別展示を準備中でした。43人の命を奪う大火砕流(1991年6月3日)は、準備がほぼ整ったまさにそのタイミングで発生しました。そのときの衝撃は、今も忘れられません(写真2)。

緊急展示は、その後の兵庫県南部地震(1995年)に際しても実施いたしました。地質災害だけではありません。1996年1月には思いもかけぬ「つくば隕石」の落下が、研究学園都市を沸かせました。この年の地質標本館緊急展示・特別展示のテーマは、つくば隕石一色でした。つくば隕石の落下に際しては、地質標本館は地殻化学部の専門家と連携して、隕石の鑑定と回収の窓口となりました。この活動が、ばらばらに砕け散ったつくば隕石の全体像をつかむのに幾ばくか貢献したのではないかと自負しています。こうした緊急時には、研究現場はただでさえごった返しており、成果公開どころでない雰囲気が濃厚なのはやむをえないでしょう。また、「地質災害という他人の不幸を客寄せに使う」との批判を耳にしたこともありました。緊急研究のホットな成果の中には、解釈に慎重を期す必要があったり、公表のタイミングに注意が必要なデリケートなものが含まれるのも事実です。しかし研究所にとって研究成果や研究活動の公開が重要であり、

このような努力が研究活動にも回りまわってプラスに働くとの認識が広まるにつれ、緊急展示に対する所内の認識も変わってきたように思われます。2000年3月末の北海道有珠火山の噴火と引き続いで伊豆諸島三宅島の噴火では、担当の研究者自らが忙しい中で時間を割いて資料を準備し、本館正面玄関ホールと地質標本館で緊急展示を実施したことは、こうした変化を象徴するものではないでしょうか。

### (3) いろいろなイベントと博物館実習生の活躍

この10年間の活動としては、来館者が参加するイベントが定着したことを忘れるわけにはいきません。地質標本館初の体験型活動は、10周年記念として茨城県大子町方面で行った「河原の石と砂金探し」でした。翌年には夏季特別展示のテーマとリンクして、栃木県塩原産植物化石のクリーニング体験「石を割って木の葉の化石を探そう」を行い、大好評を博しました。植物化石クリーニングは、担当の尾上亨主任研究官(当時)の退官後もボランティアで続けていただくことができ、毎年8月下旬の「地球何でも相談日」のお楽しみ企画として現在に至っています。尾上さんは茨城県自然博物館(岩井市)でもボランティアとしてこの活動を行っておられます。この企画に刺激されるかのように、1998年からは館の古生物研究者の手による体験型イベント「自分で作ろう化石のレプリカ」も始まりました(写真3)。この企画も大変好評で、毎回100人前後の参加者が1回につきアンモナイトなど2種類づつ

の化石のレプリカを作ってきました。常連さんのコレクションは、かなり充実してきているはずですが、そして2000年は鉱物系のイベント「水晶拾い」が開催されました。

このようなイベントでは、通常開館日には予想もできぬほど大勢のお客さんが文字通りどっと押し寄せることもあり、館のスタッフだけではとても対応し切れません。イベントの実施は、博物館実習の大学生たちが強力な助っ人となってくれることで可能になっています。博物館の専門職としての資格—学芸員資格—をとるためには、一定期間、博物館もしくは相応の施設で実習をする必要があります。地質標本館は1993年から技術指導の一環として、博物館実習生を受け入れています。はじめのうちは地学にまったく縁のない文科系の女子大学生が多く、私たちスタッフも(恐らく先方も)かなり戸惑いましたが、最近では理科系(それも地学専攻)の実習生も増え、スタッフも経験をつんで、双方にとって実りある実習ができるようになってきました。2000年の夏も5大学からの11人が、実習に汗を流しました(写真4)。

研究所の活動を紹介する活動としては、上記以外にも、工技院や自治体が主催してここ数年盛んになってきた技術系の展示会およびイベントに直接・間接的に関与するようになったこと、そして日本地質学会と共催の「地質情報展」への協力をあげることができるでしょう。地質情報展のポスターは、テーマ別に月替わりで地質標本館で展示して



写真3 体験型イベントのひとつ「自分で作ろう化石レプリカ」(1999年8月)。



写真4 博物館実習生の活躍。「化石クリーニング」で参加者の得た植物化石をペンダントに細工しているところ(1999年8月)。

地質標本館年表 (1990-2000年).

年	地質標本館の動き	地質調査所の動き	社会の動き・地球科学の動向
1990 (平成2)	8.20～27 地質標本館開館10周年記念行事 特別講演会(20日)「恐竜時代と地球環境—その進化と絶滅(小島郁生氏)」・「地下からの手紙の解読—宝石と鉱物(砂川一郎氏)」 特別展示(20～27日)「宝石と鉱物」・「三葉虫の世界」 野外実習(26日)「川原の石と砂金探し」 8.27 第8回「岩石・鉱物・化石の相談日」		11.17 雲仙火山 普賢岳噴火
1991 (平成3)	4.15～21 科学技術週間特別展示「大陸の衝突と資源—中東地域のエネルギー—鉱物資源—」 6.6～ 緊急特別展示「雲仙岳の噴火と活動史」 7.22～9.27 夏期特別展示「地球化学アトラス—北関東地域—」・「30万年前の植物化石をさぐる」・体験学習「植物化石のクリーニング」(夏休み中) 8.22 第9回「岩石・鉱物・化石の相談日」	6.14 第19代所長 小川克郎	6.3 普賢岳火砕流で43人死亡 6.15 フィリピン・ピナツボ火山大噴火
1992 (平成4)	4.13～19 科学技術週間特別展示「新しい日本列島のすがた」・「コンピューターグラフィックスで見る日本列島の地質から惑星の素顔まで」 5.1 法改正(週休2日制導入)に伴い、毎週土曜日休館 8.3～7 夏期特別展示「顕微鏡でのぞく岩石の世界：公開実演—薄片のできるまで—」・「地質調査所研究を支える試作機器」 8.10～14 体験学習「植物化石のクリーニング」 8.11 第10回「岩石・鉱物・化石の相談日」	4.1 国際協定に2課新設(1官2課)	8.24～9.3 第29回万国地質学会(京都)
1993 (平成5)	4/12～6/30 科学技術週間特別展示「金、ダイヤモンドの国南アフリカ共和国—その地質と鉱物資源—」 8.16～20 夏期特別展示「野外・室内の調査研究用機器を試作する」・「顕微鏡でのぞく岩石の世界：公開実演—薄片のできるまで—」 8.23～27 体験学習「植物化石のクリーニング」 8.27 第11回「岩石・鉱物・化石の相談日」	3.31 中国・四国地域地質センター閉所	1.15 釧路沖地震 M7.1 7.12 北海道南西沖地震 M7.6
1994 (平成6)	1.1 第8代館長に豊 遙秋就任 地質標準課長 牧本 博 4.18～22 科学技術週間特別展示「21世紀のクリーンエネルギー、天然ガスハイドレート」(6.30まで延長) 7.20～9.30 夏期特別展示「生きている二酸化マンガン鉱床、オンネトー湯の滝」 8.26 第12回「岩石・鉱物・化石の相談日」体験学習「植物化石のクリーニング」		10.4 北海道東方沖地震 M8.1 12.28 三陸はるか沖地震 M7.5
1995 (平成7)	4.18～21 科学技術週間特別展示「兵庫県南部地震—断層列島に生きるには」(一部資料追加により9.30まで期間延長) 7.26 科学教養講座参加者対応 8.25 第13回「岩石・鉱物・化石の相談日」体験学習「植物化石のクリーニング」	3.10 第20代所長 佐藤社郎 3.31 九州地域地質センター閉所	1.17 兵庫県南部地震 M6.8 死者不明者6,427人
1996 (平成8)	4.15～19 科学技術週間特別展示「つくば隕石」(6.7まで延長) 8.23 第14回「夏休み地球何でも相談」、体験学習「植物化石のクリーニング」 8.23～9.30 特別展示「マグマの恵み熱水性鉱床」 10.12 第2・4土曜日開館の実施 10.12～11.23 特別展示「切手に見る化石の世界」	4.1 統括研究調査官設置 8.23 第1回工業技術院研究所全国統一公開を実施	1.7 つくば隕石落下 8.4～14 第30回万国地質学会(北京)
1997 (平成9)	4.1 地質標準課が地質標準研究室に名称変更 4.14～19 科学技術週間特別展示「磐梯山の火砕サージ」(7.18まで延長) 4.16 入館者50万人達成 7.1 地質標準研究室長 柳沢幸夫 7.25～8.29 夏期特別展示「ジェムストーンの魅力」・「砂の世界」 8.22・23 第15回「夏休み地球何でも相談」体験学習「植物化石のクリーニング」	4.1 研究課から研究室へ名称変更 6.25 第21代所長 長谷敏和 7.1 地震地質部新設、鉱物資源部と燃料資源部を統合して資源エネルギー地質部発足 7.25 第2回工業技術院研究所全国統一公開	3.30 三井三池鉱閉山
1998 (平成10)	3.31 展示大規模改修の完了：被害地質検索モニター、地震と活断層のコーナー、多目的展示室の新設、日本の火山、富士箱根地質模型、映像室の改修など 4.1 試料調整課長 野神貴嗣 4.16 科学技術週間特別展示「活断層と地震コーナーにおいて解説」 7.31～10.31 夏期特別展示「岡本ミナラルコレクション」・「地質図と三次元地形」 8.21 第16回「夏休み地球何でも相談」・マスコット恐竜(ジोकくん)命名式・体験学習「植物化石のクリーニング」 11.14 体験学習「第1回 自分で作ろう化石レプリカ」	5.8 第22代所長 小玉嘉三郎 6.9 中央省庁等改革基本法成立(独立行政法人化決定) 7.31 第3回工業技術院研究所全国統一公開	11.18 獅子座流星雨
1999 (平成11)	3.27 体験学習「第2回 自分で作ろう化石レプリカ」 4.15 科学技術週間特別展示「地球科学と環境問題の関わり」 7.30～9.30 夏期特別展示「ブラジル産中生代白亜紀魚類・昆虫化石の世界」 共催イベント「シーラカンスの鱗化石のレプリカを作ってみよう」(7.30, 8.17, 19) 8.20 第17回「夏休み地球何でも相談」体験学習「植物化石のクリーニング」 11.1～12.6.30 特別展示「中部地質情報展：20億年のタイムトラベル」 11.27 体験学習「第3回 自分で作ろう化石レプリカ」	7.8 中央省庁等改革関連法成立(工業技術院研究所等の独立行政法人化決定) 7.30 第4回工業技術院研究所全国統一公開	8.17 トルコ・イズミット(コジャエリ)地震 M7.4 9.21 台湾・集集地震 M7.6 9.26 神戸市に隕石落下 11.12 トルコ・デュズジェ地震 M7.2
2000 (平成12)	1.17～3.30 特別展示「深海底の熱水噴出現象」 3.25 体験学習「第4回 自分で作ろう化石レプリカ」 4.3～有珠火山噴火速報の展示 4.17～22 科学技術週間特別展示「中部地質情報展：地質図の読み方と役立つ・中部の地形を立体的に見よう」(4.1～29) 7.28 開館20周年記念式典 7.28～9.29 特別展示「水晶—クリスタルの魅力—」 7.28—特別展示「有珠火山・三宅島火山研究」 8.25 第18回「夏休み地球何でも相談」体験学習「植物化石のクリーニング」 8.26 「水晶拾い」 11.11 体験学習「第5回 自分で作ろう化石レプリカ」	7.28 第5回工業技術院研究所全国統一公開 11.29 地質標本館試料調整課に人事院総裁賞	3.31 有珠火山山麓噴火 6.26 三宅島噴火、以降9月まで三宅島から神津島海域の群発地震と三宅島の噴火活動が続く 9.2 三宅島住民本土へ避難 10.6 鳥取県西部地震 M7.3 12.10 白川英樹筑波大学名誉教授にノーベル化学賞

おり、秋から春にかけて見逃せない見学上の目玉になっています。これとは別に、地方の博物館の企画展への協力や博物館新設への協力が定着したことも、この10年間の活動として忘れるわけにはいきません。地質標本館にとっては研究試料の系統管理が研究成果公表と並ぶ設立原点の一つですが、近年急速に数を増した地方の博物館にとっては館所蔵の膨大な地質標本が大きな魅力であることには、ぜひ注目していただきたいと思います。

ここ10年間の地質標本館の活動内容を、1990年までの活動を纏めた「地質標本館の年表」(尾上ほか、1990)に追加する形で付表に示しました。この10年を設立直後の10年間と比較したときに、地質標本館を舞台とした活動が多様化したこと、同時に、館の外で地質標本館としてのプレゼンスを示す機会が増えたことに改めて驚きを覚えます。地質

標本館が本体の研究所—地質調査所—とは違った、一種の博物館としての独自のカラーを出すようになったということもできるかもしれません。2001年4月から、工技院研究所は独立行政法人に移行するとともに、大幅な改組をする予定です。地質標本館も、大きくその在り方を変えることになりそうです。博物館としての性格を強めてきた地質標本館の今後の歩みに、どうぞご期待ください。

文責：奥山(楠瀬)康子・遠藤祐二・熊田みさ子

#### 参考文献

尾上 亨・神戸信和・山田直利・松江千佐世・奥山(楠瀬)康子  
(1990)：地質標本館の年表。地質ニュース、no.431、p.70-74。

---

Geological Museum (2001)：Twenty years of the Geological Museum.

---

< 受付：2000年9月21日 >